

## プロローグ

春先の日暮れ。どんな季節になろうと、人の街の騒々しさは変わらない。まだかなり冷える日もあるこの時期でも、人々は四季を我が物だといわんばかりに街中を闊歩する。だが、凍てつくようなだけで何もない日暮れの公園で、若い者が何かをするのは珍しいだろう。

「アナタ達がここに辺を荒らして回ってるって噂の連中ですか。ほんとにたったの四人だったんですね」

「そっちだって六人ぽっちじゃねーか。大体、荒らしてるつもりないんですけど」

この日、暗くなると滅多に人の来ないようなやや寂れた公園で、二つのヤンキー集団がメンチを切りあっていた。抗争である。

“彼女ら”のようにケンカをする不良集団は一般的に現在には珍しい存在だが、ここいらではまだその風習が残っているようで、特にここ最近では活発化してきているらしい。

なぜか。それは片方の……四人組の方の女子グループが、積極的にその勢力版図を拡げているからである。それも、ここ半年程で一気にだ。何やらおかしい噂もついて回っているようで、多くの不良娘やそうでない者達から恐れられている

らしい。

もう片方の六人組の方は、そんな彼女達の腕っぷしに興味を持ち、勝負を持ちかけて来た血氣盛んなレディースである。それも、そこそこの名と歴史を持っているような連中らしい。それにしても規模が小さいが、今時身体で争う世界に飛び込むのは六人でも大所帯ということだ。

冷めた見方をすれば、どちらも一般からはみ出した者達の集まりだ。もう一つ共通点を上げるとすれば高校生だということくらいか。全員コートなどを羽織っているが、スカート等から分かるようにその下は学校の制服だ。両者は学校終わりにこの場所で指定の時間に落ち合う約束で集まっていたのだ。

「少数精鋭ってご存じですか？まあそう威勢がよくなくてはこちらもやり甲斐がありません」

ニタリとどこか艶やかに笑う六人組のリーダー、宮田<sup>みやた</sup>諒子<sup>りょうこ</sup>が変に丁寧語を使っているのは、お嬢様育ち故の癖だ。どうにもワルへの憧れから、噂に聞いていた校内のそのチームに入り、財力でトップに成り上がったらしい。ただ、人数がこれだけの規模に減っていたのには面食らったらしいが。

「こつちからわざわざ来てやったんだ。寒いんだからヤルつもりならさっさとやりましょーや」

一方四人組の方のリーダー、北條<sup>ほつじょう</sup> 愛美<sup>まなみ</sup>は、その粗野っぽ

さを十分に発揮するように、両手をコートのポケットに突っ込みながら答えた。だが一応、彼女もお金持ちの娘なのであるのは、なにかの縁だろうか。

「フフ、いいじゃないですか。せっかくだからお話ししましょうよ。例えば、あなた達の噂についてでも……」

「噂だあ？」

恐らく、思い当たる節があるのだろう。愛美は小首を傾げながらも半笑いだ。

「ええ、あなた方が特殊な戦い方をすると聞き及んでおりましてねえ。是非そちらの方を窺いたいものと」

「ヤリあう前から手の内晒すバカがいるかよバーカ」

「で、あれば、噂自体は本当だとおっしゃるわけですね？」

「……ま、それは認める」

少し痛手を踏んだかと口を結んだ愛美だったが、それくらいなら別にいいかと思ひ直す。何よりも、賢さをアピールするような態度と喋りが鼻について会話の内容など割と気にしていなかった。

「ねーねーまなみっち。アイツなんで敬語使ってんの？なんかイタくない？」

笑い声で会話に割って入って来たのは福下 瑠恵好<sup>ふくした るいず</sup>。バツチリなキラキラネームに違わぬお調子者である。特に、人を

バカにするのが好きらしい。

「そこは言ってやるな、色んなのがいるんだ世の中」

「おい！失礼だぞ貴様ら！諒子様に向かって！」

諒子の取り巻きの一人が、愛美たちに噛みつく。

「プハーツ！様だって様！今時そのキャラは幾らなんでも  
キビシーよねえ！」

「こ、この——！」

「落ち着きなさい。いいんですよ、それくらい言わせてやりなさい」

その諒子の一言がなければ今すぐにでも戦争が勃発して  
いただろう。流石にリーダーだけあって金だけではない女傑。  
かと思いきや、その笑顔が引き攣っているのを見て愛美はお  
かしくなった。

「おい、御託はいーから早くコイツらぶっ潰そーぜ！オレ  
もさみーんだよ」

愛美よりさらに乱暴な物言いなのは、四人組で一番の身長  
を誇る佐々木<sup>ささき</sup>香夏<sup>かな</sup>だ。腕っぶしは立つが、気の短いまさに  
ヤンキー少女である。

「まったく……そちらには痴れ者しかいらっしやらないの  
かしら」

仕返しと言わんばかりに、諒子は白いため息をついた。取

り巻き立ちもクスクスと笑う。

「何！？なんかバカにされた？」

「ああされた」

「なんて？」

「お前らバカだってさ」

愛美が溜慰好にテンポよく状況を咀嚼する。溜慰好も単純なので、これには頭にきたらしい。

「なにをー！こっちにはチヨー賢いすずっちがいるんですけどー！ねーすずっち」

すずっちと言われた浅黒い肌の少女、はるなみ春波すず錫は、スマホを見続けながら「うん」とだけ答える。彼女らしいといえば彼女らしい。

「フフ、何やら警戒する必要もなさそうですね……こんな低能になぜ他のチームはやられたんだか。呆れますね」

他のチームというのは彼女らにとってもライバルに当たる不良集団だ。昨今は若干ナアナアな付き合いになっていれども、お互い認め合い警戒し合う実力はあるので、不思議で仕方がない。

「お、いよいよやるか」

香夏が拳をポキリと鳴らした。それを合図にするように、諒子チームも臨戦態勢に入る。

「しゃーねーやるか」

それを見た愛美も、残り三人に「やるぞ」とだけ発破をかけ、コートから手を出した。

「それでは参りましょう……みなさんとりあえず鼻に注意してください」

「ハイ！」

「！」

ある程度バレていたか、と愛美は思った。そう、彼女達四人の戦い方は相手の鼻にダメージを与えるのだ。それを、漠然とだが諒子達は知っていた。情報源がライバルグループであり、その上やられたグループは何故か異常に情報を口にすることを恐れたので、詳細までは得られなかったのだが。

だが、知られていたとて問題ない。いやむしろ有利かもしれない。愛美はニヤリとほくそ笑む。知っていた方が相手の動きは単調になるだろうからだ。この戦い“楽に”終わるかもしれない。

そして、双方にらみ合う中、誰ともな足を出した。その足音こそが開戦のゴングであり、地獄の階段を上る音になるのだ。

「おい、そっちは終わりそうか―」

「まってゝまだ遊び足りない！」

「いい加減にしとけよ、尻冷えて風邪ひくぞ」

「判ってるよ、えへへ」

愛美と瑠慰好が話し合っている。空はもう茜色を捨てかけていて、光源を街灯に交換しようとする時間だ。

「あそこで待ってるからな」

「はーい！」

すぐ近くの街灯に指をさす愛美に返事をしつつ、瑠慰好はヒイヒイと泣き喚き、尻もちをついている一人の女子に迫り寄った。

「さあて、ああ言われたし、トドメ刺しちゃうよゝ」

「や、やべ……やめてくたはい……もういやです……」

少女はこの寒い中、顔中自分由来の汁まみれにしている。もう後ずさる気力もないのか、手を震わせているからなのか、少女はドツと後ろに倒れこんだ。

「やめないよゝ？だって楽しいんだもん！」

瑠慰好は何の躊躇もなく少女に近寄ると、身を翻し彼女を跨いだ。

「ひっ！たすけ——ムグ！」

為されるがまま、少女の顔は瑠慰好の尻の下敷きになって

しまった。溜慰好はスカートを間に挟まないよう少女の顔に座って、女王もかくやとクツクツ笑っている。彼女は自身の尻の穴を少女の鼻に刺しこんだ。そして――

ぶばっびいいいい！！！！！！

彼女の尻と、少女の顔の間から、耳を覆いたくなるような音が噴出した。同時に、顔と尻の隙間から温い風がピューと飛び出す。

ヒクリと蠢いた肛門から、コロコロと下った腸内ガス発射されたのだ。つまり屁だ。溜慰好は思い切り尻を顔に密着させて屁をこいたのだ。

「んびゅううううう！！むっぎいいいいっ！！！」

須臾の間に、少女は雄たけびともとれる大声を放つこととなった。それはその屁の臭さが故であることは疑いようがない事実だった。

まるで腐った卵十数個を糞便で半熟に茹で上げたような強烈な臭いが鼻から侵入してくれば、それに身体が拒否反応を示すのは当然だ。

だが少女が身体を揺らして抵抗しても、上に乗る溜慰好は





女ではなく自身のパンツを気にする。少女の唾液や鼻水、そして苦痛と悔恨の涙で濡れていたからだ。

その後、瑠慰好は奥の街灯の下で待っている愛美の方へ足を向け、そちらへと歩みを進める。

だがすぐに、近くの甲高い破裂音がなっているところへと立ち寄る。香夏が別の少女に顔面騎乗して、彼女特有の可愛らしい音の屁を連発していた。

「おらっ！」

**バぷうううウウウうー！！**

「んんっぎゅうううううー！！……んん……」

香夏の下で、彼女より大柄な女子が、丁度瑠慰好の先ほどの娘の末期のように微振動していた。

「かなっちーどんな感じー？」

「あー、悪い手間取ってる。コイツなかなか死ななくて……ふんっ！」

**ブぷぴいいいい！！！！**

「んー！！！！……ん……んう……」

便臭の強い香夏の屁が、下に敷かれるものを地獄へと誘う。

「手伝おうかー？」

「あ、いやいい。今死んだ」

大柄な少女は、身体が大きいだけが強さでないことをその

鼻で学んだ。

彼女達たちの屁は、一部は本当に死んでもおかしくないような臭いを放つのだが、幸いにも今のところは失神者だけで済んでいる。

二人は落ち合う場所へと歩みだす。

「それにしてもかなったこの寒い中でもパンツ脱いでお尻出すんだねー」

「まあ、それがオレのスタイルだからな……クツソ冷えたけど」

などといった会話を二、三していれば、目的の街灯まですぐたどり着く。そこには愛美と錫と、諒子がいた。ただし、最後の一人は街灯にロープで縛りつけられている。

「おし、揃ったな。意外と早かったな」

「まあね！伊達に経験積んじやないって〜」  
溜慰好が後頭部で手を組んで嬉しそうに答えた。

「ちょ、離しなさいあなた達！」

そこに、諒子が喚いて入ってきた。寒い中縛られ、その上これまでの惨状を見てきているので震えている。

「さーこいつどうすっかなー」

「てかなんでこいつだけ捕まえてんの？」

香夏の素朴な疑問に、愛美は答えた。

どうにも話によると、諒子自身は戦いに参戦していないらしかった。相手チームがボコボコにされるのを高みの見物する気であった。これは毎度のことであり、すなわち彼女達は実質五人の戦闘グループなのだが、それでも腕に自信はあり勝つ気であり、実際これまでも勝ってきた。

しかし、彼女たちの旗色はすぐに悪くなった。束になってかかっていったところを、錫が格闘戦でのつもりで単騎でブラフをかけ、一手に員数を引き受けると攻撃を華麗にかわし、直後に特濃大量ガスの壁を放ったのだ。そのあり得ないような程の量と臭いに諒子チームは大混乱。一人だけ無事だった者も、香夏が攻撃を防いで錫を守った。その後一人を錫が即座に始末すると、あとは錫が二人目を狩り、格闘戦向きでない溜慰好の代わりに香夏が二人を制し、愛美が一人を撃破し組み伏せた。見事な腕前と連携力である。

ここで錫の屁について特筆すると、彼女のそれはオナラ責めを始めた頃から比べると各段にレベルアップしていた。オナラ責め主体の不良行為の開闢以来、日々食生活に磨きをかけ続けており、本来の特殊な体質も相乗して早い段階で人間離れた屁が出るようになっていたのである。そして彼女はそれを確実に自分の実力としていた。勿論成長は他の三人も大幅にしているが、錫の伸び率には敵わない。彼女は化け物

じみていると仲間内でも恐れられる程だ。

話は戻って、愛美は敵に放屁責めをしていると、諒子が逃走していることに気が付く。そこで、すぐにも手を開けられるうえ、運動の得意な錫に指令を出し捕らえさせ、現在に至るというわけだ。なお、放屁責めに備え彼女たちの荷物にはロープや、口をふさぐためのガムテープなどが常備されている。

「ほーん、えらそーにしてた割に一人で逃げ出そうとしてたわけ。大したリーダーじゃないか」

香夏が皮肉っぽく笑って諒子を見た。ギリリと歯を噛むことしかできない諒子は、実に歯がゆい気持ちだ。だがここで秘策を思いつく。

「そ、そつです！こっぴどくしませんか！お金をさしあげます！お望みの額……払える分なら！後日ご用意すること——」

諒子の言葉を遮るように、彼女の目の前にスツと愛美の右拳が差し出された。それは、間髪入れずに五本指を見せつける。

「これは——っ！……？！ひきやああああっあああ——！！」

諒子は絶叫した。金切声だ。急に鼻先に、大盛りの腐ったニンニクの腐卵ソース添えのような臭いを差し出されれば、

そうなるのは当然と言えばそうなのだが。

「つー！つたく、とんでもねー声出すな……でも、嫌いじゃない」

愛美はゴホゴホ咳嗽する諒子の前髪を無理やり引っ張り、顔を上げさせた。

「いいか、アタシらが欲しいのは金じゃない。あんたみたいなカワイー顔した奴が屁で苦しむときの絶望なんだよ」

——何を言っているか分からない。でも、凄くおぞましいものが、人間でないようなものが目の前にいる気がする。見れば、その場にいる全員が妖しい笑顔を湛えている。狂気だ。ここにいるのは狂気なんだ。

諒子がそう思ってももう遅い。地獄の夜、屁まみれの時間が幕を開ける……。